

統語論・意味論・形態論の研究(2)

高橋 英光

認知言語学と語用論の分野では、単著、論文集、翻訳、学術論文、テキスト各々で優れた成果が刊行された年となった。

まず語用論から見よう。Osamu Sawada (澤田治) の単著 *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface* (Oxford University Press) は、日本語の「もっと」「ちょっと」「少し」「とても」「何よりも」や英語の *totally, more than anything* などのスケール修飾語の研究である。その主目的は、意味的スケール修飾語と語用論的スケール修飾語の共通点と相違点およびそれらの体系的分析、語用論的スケール修飾語の多様性の解明、埋め込み構文における語用論的スケール修飾語の解釈の説明、意味的スケール修飾語から語用論的スケール修飾語へ変化する環境の特定、などが含まれ豊富な例と共に明晰な議論が展開されている。例えば、「ちょっと」と「少し」は類義の“minimizers”だが dual-use (意味的スケールと語用論的スケールの両用) は前者にしか見られないという観察や(「ちょっと／*少しハサミある?」)、語用論的スケール修飾語における higher-scale modifiers と lower-scale modifiers の区別などには著者の優れた洞察が表れている。スケール性とは(意味レベルの)個人や事態の評価だけでなく(語用論レベルで)様々な主観的感情やポライトネス、発話の優先性、話者の態度、意外性なども表すという分析や従来の研究がスケール修飾語の論理的意味と語用論的意味(含意)の違いに焦点を当てたのに対して本書は両者の共通性・関係性に着目している点はきわめて独創的である。さらに、依拠する多次元的アプローチが当該現象の分析において関連性理論など他の理論と比べどこに利点があるのかを明確に論じているのも本研究の優れているところである。本書がスケール修飾語と含意の問題や意味論と語用論のインターフェイスをめぐる議論をいっそう活発にすることは疑いがない。

語用論の分野ではつぎの2点も目を引いた。東森勲『翻訳と語用論』(開拓社)は関連性理論による翻訳の研究である。翻訳の本格的な言語学研究は日本ではまだ盛んではなく、「英語ありき、日本語を求める」とか「日本語ありき、英語を求める」という主旨の翻訳本はあっても翻訳についての説明原理を欠いていることを指摘し、本書は表意、推意、語彙語用論、句語用論など一般のコミュニケーションを統括する規則を用いて翻訳(の実例)を理論的に分析している。例えば、「出たーっ出たーっ」の英訳“A ghost is here! A ghost is here!”では、日本語文の表意が「[幽霊が]でた、[幽霊が]でた」だが主語が明示されていないために[幽霊が]の部分が a ghost として英

訳される、という類いの分析例が豊富に提供されている。翻訳とは一般のコミュニケーションの1例であり、借用とは「エコー的用法の一種」など、関連性理論の立場からの新鮮な見方を読者は学ぶことができる。「ことわざ」「ジョーク」「ことば遊び」「方言」などきわめて身近な問題が扱われているため翻訳をこれから本格的に研究する人だけでなく関連性理論の基本と応用を学びたい人にとっても格好の図書であろう。

Risa Goto (後藤リサ)の単著 *Rhetorical Questions: A Relevance-Theoretic Approach to Interrogative Utterances in English and Japanese* (ひつじ書房)は、日本語と英語の修辞疑問文の解釈の仕組みを関連性理論の立場から分析したものである。前半では Searle や Grice の修辞疑問文分析がおおむね通常型(情報疑問)か非通常型(修辞疑問)の二分法を取っている一方で、著者は日常の疑問文の多くは純粋な情報疑問文でも純粋な修辞疑問文でもないことが多いと述べ、この立場から「修辞性の連続体(continuum of rhetoricity)」を提示し関連性の理論、とくに interpretive resemblance や desirability の概念を用いて修辞疑問文解釈の問題の解決法を提案している。後半では日本語の2つの文末表現「とどうするか」と「ものか」を論じ、修辞疑問の判断と情報疑問の判断は連続体の両極であり、修辞性の認識と解釈者による話者の解離的態度(dissociative attitude)の度合いの認識とを関連づけて説明している。本書は修辞疑問文について斬新な見方を提供して非常に読み応えのある図書になっている。その分析・提案が今後多くの実例データに照らしてどのように検証されるかを見守りたい。

つぎに認知言語学分野に移ろう。山梨正明『新版 推論と照応——照応研究の新展開』(くろしお出版)は、初版の刊行(1992年)から20年以上が過ぎてしばしば絶版となっていた『推論と照応』の待望の新版である。新版では巻末の最終章(「照応研究の新展開——認知的パースペクティヴ」)が追加され、この四半世紀の認知言語学の目覚ましい発展と広がり、そして認知言語学のアプローチがいかに照応現象に新たな洞察・分析をもたらすのかを平明に解説している。例えば、日本語では「一升[瓶.]を飲みかけて、途中で[それ.]をこぼしてしまった」などと言うが、「それ」は「一升瓶」を直接指すわけではなく「(一升瓶の)中身」である。この間照応と呼ばれる現象の背後では〈容器〉から〈中身〉という空間の近接関係に関わるメトニミー認知が作用し、著者はこれをトポニミーと呼ぶ。本書では多彩な認知の働きと言語使用の関係の時には文学作品の古典からも引用して論じている。これは「言葉の感性的な側面、創造的(ないしは想像的)な側面の探求に進展していくため」(まえがき)という著者の見識の表れである。この名著の新版は、初版をよく知る世代はもちろんのこと将来を担う言語研究者にとっても吉報である。

高橋英光『英語の命令文——神話と現実』(くろしお出版)は、英語命令文についての「パロールの文法」を提供して認知言語学的に論考した書と言えよう。英語の命令文には、「命令文はおおむね指示や依頼などに使われる」「(直接)命令文は無礼に響く

ので英語話者はできるだけ避けるか疑問形・条件形を添える」などと説明されるが、本書は、命令文の意味は曖昧で多義であるのがふつうであり、(単純)命令文はすべての間接表現のおよそ15倍使用頻度が高いことを示す量的データを提示する。また日本語の命令形「みろ」は依頼形「くれ」より拡張用法の適用範囲が広い(例えば、「ここで君のことが表面に出てみろ／*くれ、ぼくはどんなふうに悪口を言われるかわからない」という分析は新しい知見ではないだろうか。本書は、コロストラクション分析の問題点、関連性理論分析の問題点、受益二重目的語構文(例えば“Cry me a river.”)なども扱われているので、英語(と日本語)の命令文、指示表現と発話行為さらに言語データの問題と語用論の理論に関心を寄せる読者の興味を引くと思われる。

夏海燕『動詞の意味拡張における方向性——着点動作主動詞の認知言語学的研究』(ひつじ書房)は、2017年3月発刊だが日本語の動詞「みる」「食う」「かぶる」などの拡張用法と関連現象の認知意味論研究である。日本語の「みる」は視覚以外の意味でも「憂き目・痛い目・ばか・泣き・いい目を見る」などの言い方があるが、「いい目を見る」を除き被害性を帯びるものが多く「食う」「かぶる」にも同じ傾向があると著者は指摘する。これらを「着点動作主動詞」と命名し日本語・中国語・韓国語・英語などの同様の現象を議論している(例えば英語では swallow new price hikes など)。このような意味拡張が起こる要因を(自分の領域へのモノの移動)というイメージ・スキーマに求めているが、母語話者が気づきにくい日本語の動詞の用法についての素朴な疑問から出発し、丁寧に多言語データを集めて注意深い分析を加えるという手堅い分析法を実践している。提示した観察結果のすべてが説明されているわけではないが、これから博士論文を書く人にとって一つの良い手本となる研究書である。

Takashi Kobayashi (小林隆)の単著 *I mean as a Marker of Intersubjective Adjustment: A Cognitive Linguistic Approach* (ひつじ書房)は英語の談話標識 *I mean* に焦点を絞り、その多様な意味・用法の背後にある認知プロセスを明らかにする試みである。従来の語用論的分析では repair, causal meaning, explication というラベルが与えられていたが、本論は *I mean* の本質を「間主観的調整」、つまり聞き手が話者とは別の事柄に注意を払っていることに気づいた時に話者が使う、と規定する。Verhagen の間主観性の理論を Langacker の「現行談話スペース (Current Discourse Space)」の理論で補強し、注意の共有、面目の保持、発話順序の交代や他の間主観的要素が網羅できると主張する。本書は今後の展開を大いに期待させるパイロット研究と言えるだろう。

中野研一郎『認知言語類型論原理——「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』(京都大学学術出版会)は、ラネカーを中心とする認知言語学のパラダイムと従来の日本語学・言語学的前提を批判的に取りあげて新しい言語類型論を試みている。「客観」という名の主観、「言語における「客体化」論理: 英語を中心に」、「言語における「主

統語論・意味論・形態論の研究(2)

体化」論理：日本語を中心に、「言語のグレイディエンス：英語の中の「主体化」論理と日本語のアクロバシー」の4部からなり、本書の射程は非常に広く言語学にとどまらず哲学、人類学、社会心理学とも関わる点で難解な面があるが広範囲の読者が予想される。本書の最後に「(解題)言語類型論の新展開」(山梨正明)があり、本研究の残された課題が指摘され理解の助けになる。

認知言語学の論文集では3点が目を引いた。廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子(編)『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』(開拓社)は、廣瀬氏が検討を重ねてきた三層モデルとそれに関連する現象の研究論文を収めている。内容は「第I部 基調論文」、「第II部 三層モデルとその適用」、「第III部 三層モデルとその周辺」の3部からなり、三層モデルと関わりが深い意味論、語用論をはじめ統語論、形態論、社会言語学、通時的研究も網羅されている。英語は公的自己中心言語で日本語は私的自己中心言語という視点を踏まえつつ、各論考は日英語の多様な現象について独自の分析を展開し力作ぞろいである。日英語の文法と語用論の対照研究や新しい理論言語学を模索する研究者を大いに刺激するだろう。編者以外の執筆者は、長谷川葉子・今野弘章・五十嵐啓太・岩田彩志・西田光一・井出里咲子・森雄一。

天野みどり・早瀬尚子(編)『構文の意味と拡がり』(くろしお出版)は、日本語学と言語学・英語学の協同プロジェクトから生まれた論文集である。「構文研究の流れ」、「記号論の視点からの拡がり」、「構文の成立と拡がり」、「規範からの逸脱と拡がり」の4部構成で13の論考が掲載されている。「総論 構文論の最近の展開と今後の展望」では Fillmore (と UC Berkeley の研究者達) から Goldberg, そして以後の言語変化研究に関わる構文化理論の誕生までが的確に記述され、「総論 日本語研究分野における構文研究」では日本語学の構文研究の特徴として考察対象が構文のまとまり性と意味の拡がりへと展開したことや構成体が新たな意味を獲得するプロセスへの関心などが挙げられている。論考は、日本語学が7編、英語学が2編、日英語対照が1編、フランス語と西ロマンス諸語が1編だが、「逸脱表現」、「発見構文」、「受益構文」、「助動詞構文」、「イ落ち構文」、「縮約節構造」、「破格構文」、「移動動詞の文法化」など興味をそそるテーマに溢れている。構文研究の初心者から最先端で活躍中の研究者に至るまで有益な知識と洞察を提供している。執筆者は、編者以外では有馬道子・三宅知宏・益岡隆志・加藤重広・大澤舞・今野弘章・本多啓・柴崎礼士郎・渡邊淳也。

中村芳久教授退職記念論文集刊行会(編)『ことばのパスpekティブ』(開拓社)は、中村氏と所縁の深い研究者・大学院学生の論考を集めている。内容は「類型論的研究」、「日英比較」、「語彙カテゴリー・文法カテゴリー、メタファー」、「英語表現・英語構文」、「言語発達・言語習得」、「談話標識」、「日本語における主観性」、「メディア・教育」、「認知モード・言語進化」の9部からなり、ことばと認知に関わる広範囲の現象がカバーされている。タイトルが示唆するように認知言語学のパスpekティブの広

回顧と展望

さと豊かさがよくわかる論集となっている。執筆者は中村芳久・堀田優子・濱田英人・村尾治彦・轟里香・谷口一美・岩崎真哉・市川泰弘・森貞・川島嘉美・小林隆を含む総勢 42 名。

認知言語学のテキストではつぎの 3 点が注目される。西村義樹(編)『認知文法論 I』(大修館書店)が刊行され「シリーズ認知言語学入門」がついに完結した。第 1 章は認知言語学を生成文法との対比で特徴づけ認知文法の文法観を簡明に解説し、2 章から 6 章はそれぞれ「名詞の認知文法論」、「文法の中の換喩」、「認知文法と格」、「モノとコトの認知文法論」、「英語の程度比較・程度修飾表現の認知文法」と続き各分野の第一人者による秀作が並ぶ。全体を読むと入門シリーズという性格を保ちつつも個々の執筆者の独自の認知文法観が随所に溢れ、他のアプローチとの相違(例えば Jackendoff の理論との違いなど)を具体的かつ的確に対照させている。我が国でおそらく初めての認知言語学シリーズがついに完成しこの豪華な論集が日の目を見たことを心より祝いたい。執筆者は編者を除くと早瀬尚子、熊代敏行、小早川暁、友澤宏隆。

瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望『解いて学ぶ認知構文論』は、「認知言語学演習」(全 3 巻)の第 3 巻だが、周知のように認知言語学のテキストとして初めて演習方式をとったものである。内容は、「第 5 章 構文の力」(1 節 世界の切り取り方、2 節 構文の種類、3 節 イディオム・コロケーション)と、「第 6 章 話せばわかる」(1 節 ことば・文化・思考、2 節 語用論、3 節 テキスト・談話)であり、具体的な言語例を豊富に提示して読者にどんどん考えさせるスタイルをとっている。他の巻と同じく「実力問題(A と B)」、「探求テーマ」、「探求への道」が添えられるが、「探求への道」では認知言語学に狭く限定せず代表的と思われる重要な文献を紹介している。この点では大学生のレポート・卒論のテーマ探しだけでなく研究者にとっても有効に活用できるだろう。

安原和也『ことばの認知プロセス——教養としての認知言語学入門』(三修社)は、主に一般読者や入門者を意識し日本語の身近な例を紹介しつつ認知言語学の考え方をわかりやすく解説したものである。「プロファイリングの世界」「メタファーの世界」「ブレンディングの世界」の 3 章に話題を絞り、巻末の読書案内では刊行済みの類書を初級、中級、上級に分類して紹介しコンパクトな入門書として成功を収めている。まさに認知言語学についてもっと学びたいと思わせる図書である。

John Taylor (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*, Oxford University Press が認知言語学の中で重要な位置を占める図書であることについては異論がないだろう。この全訳が刊行された(西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫(編訳)、古賀裕章・小早川暁・友澤宏隆・湯本久美子(訳)『メンタル・コーパス——母語話者の頭の中には何があるのか』くろしお出版)。この図書を読みながらその真摯な取り組みと創意工夫に感銘を覚えずにはいられなかった。まず原著の魅力

統語論・意味論・形態論の研究(2)

が見事に日本語訳で再現されている。さらに訳注を大幅に加えて原著とは別の事項索引を作成し原著に含まれる統計学的記述の誤りを(時には他分野の研究者の協力をあおぎ)修正している。編訳者による「解題——メンタル・コーパスが示唆するもの」はこの上なく貴重である。これは「I ことばの知識は動的に更新される使用の記憶でできている」(大堀壽夫)、「II 『メンタル・コーパス』から考える英語の学び方と教え方」(平沢慎也)、「III 認知言語学におけるメンタル・コーパス革命」(西村義樹・長谷川明香)の3編からなっている。個人的には、Taylorの『メンタル・コーパス』は現在のビッグデータの時代の申し子であるという指摘(I)、動詞 know には why よりも how が結びつきやすいのだから英語の初学者には“How do you know ___?”のような local generalization を与えるべきという提言(II)、『メンタル・コーパス』は文法と意味の関係についての(Langackerを中心とする)認知言語学の考え方に実質を与え言語研究がなぜ使用基盤主義であるべきかを明解に説明したという指摘(III)、が印象に残った。本邦訳は原書をすでに読み終えている読者にも多くの新しい情報と知見を提供するだろう。

つぎに認知言語学の論文を1点紹介したい。国際認知言語学会の機関誌 *Cognitive Linguistics* (2017, 28 (2): 239–285) に掲載の Izutsu, Narita Mitsuko and Katsunobu Izutsu (井筒美津子・井筒勝信) “Stopgap subordinators *and* and *but*: A non-canonical structure emergent from interactional needs and typological requirements” は英語の等位接続詞の非規範的用法の論考である。コンマを等位接続詞の直後に置くこと、例えば “He said it wasn’t that it was unsafe but, ...we still need to be very careful about it.” は規範から外れ、英語の等位接続詞が第一要素ではなく第二要素と構成素を形成するのが原則であるのは周知の事実である。本論文は、“You have to go **and**, ... feel **and**, ... visit **and**, .. say, oh yeah well, ...” のように *and* の直後にポーズを置く例の増加に着目し、この現象を stopgap subordinator と名付けその動機を探っている。従来の研究では、会話のやりとりの中の不測の事態・偶発性からこのような用法が生まれると説明されていたが、本論はそれだけではなく VO 言語の類型論的特徴にこの現象が起こる動機を求め、その根拠として日本語のような OV 言語には stopgap subordinator の現象が見られなく(「*確かに高いでも、やっぱり欲しい」)、「従位接続詞+従位節」の語順が認知的、意味的、談話語用論的に競合しないためと主張する。対照的に VO 型言語ではこの3つの動機が競合し認知的効率性と会話の相互作用的要求からこの現象が生まれざるをえないと結論づけている。日本語母語話者のメリットを活かした英語の等位接続構造の認知類型論研究として一読をお薦めする。

開拓社言語・文化選書から今年度も多くの注目すべき図書が出版された。澤田治美『意味解釈の中のモダリティ』上下2巻は、発話や文の意味の解釈におけるモダリティの関与の仕方について英語法助動詞を中心に考察したものである。全14章からなる大

回顧と展望

著だが、上巻ではモダリティの定義とその体系・多義性、モダリティの拡大と深化、相関性、透明化などについて身近な事例に基づきわかり易く論じている。全体を貫いているのはモダリティとは「事柄(もしくは、素材、命題内容)のありよう」で、意味とは「外なる世界の捉え方であり、内なる感情の表出であり、相手に対する言語行為」であり、「言語の意味は、モダリティなしに成立し得ない」という著者の立場である。2巻共に多くの優れた知見に溢れているが、モダリティが単一文种だけではなく文の境界を越えて解釈されるという指摘(“The garage is a mess, John *must*/**should* have been washing the car.”)や、義務のスキームを X(義務を課す主体・義務の起点)、Y(義務を課される存在)、p(実行すべき義務の内容)、Z(義務づけのための動機づけ)の四因子から捉え“You really *must* go to church next Sunday—you haven’t been for ages.”では Z が明示されているが“Catholics *have to* go to church on Sundays.”は明示されていないという分析は多言語のモダリティ研究に適用可能であろう。

下巻では、個別の日英語法助動詞を取り上げ、行為の非実現性・困難性と同等比較、自発的知覚、心理的衝突、断定と予測、状況の特定性、現実世界領域と言語行為領域、現実性と仮想性などの観点から論じている。個人的には、need の本動詞と法助動詞の意味の違いを「現実世界の叙述」と「否認の言語行為」との対立とする分析を興味深く読んだ。心と言葉の関係を真摯に探求してきた著者によってその研究の全体像がこのように一般読者にも近づきやすい図書として読めることは大変喜ばしい。この上下巻は日英語のモダリティと法助動詞研究の必読書となる。

出水孝典『動詞の意味を分解する——様態・結果・状態の語彙意味論』は全体が9章からなり1~6章は主に Beth Levin と Malka Rappaport Hovav が提唱した事象スキーマと動詞の意味表示理論の解説、7~9章は Talmy, Goldberg, Langacker らの認知言語学や構文文法の考え方・道具立て(例えば、衛星枠付け言語と動詞枠付け言語、語根のフレームとプロフィール、因果連鎖など)を参照・援用しつつ著者独自の理論を提示している。近年の Levin と Rappaport の研究と Goldberg の構文文法との接点にも触れているので語彙意味論の立場を取る人にも構文文法・認知言語学寄りの立場を取る人にも有益な情報を提供する図書であろう。

昨年度のコラムの最後で、「(認知言語学と語用論の)二分野を融合する研究書が目立ったが、この傾向はもうしばらく続きそうである」と書いたが、これに加えて今期は両分野におけるアプローチの多様化に気づかされた。融合と多様化という流れはますます強まるのではないだろうか。

(北海道大学名誉教授)